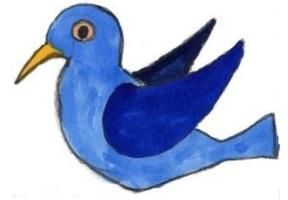


花だより 鳥だより



ポロト案内舎 2020年8月 104号

日本全国猛暑の8月でした。ポロトも例外ではなく、暑い日が続きました。とは言っても、最高気温は30℃どまり。夜には涼しい風が吹いて、寝苦しさは感じません。しかし、以前に比べ、半袖で過ごす期間が確実に長くなっています。



ポロト沼で避暑



8月はアオサギが目立ちます。タンチョウよりもアオサギです。子育てが終わると、涼と食べ物を求めてやってくるのです。アオサギの狩りは待ち伏せ型。水中にじっと立ち、魚が近づくのを辛抱強く待っています。今人気のハシビロコウと同じ戦略ですが、あまり知られてないようです。動くのは、時おり飛来するオジロワシに邪魔され、奇声を上げて逃げ回る時くらいです。



涼しさを感じる花たち



夏の花が姿を消し、秋を感じさせる花たちが登場してきました。その一番手はサワギキョウ。桔梗と聞いただけで秋を連想しますよね。青い花弁が目には鮮やかで、清涼感をたたえています。しかもこの青は、花が終わった後、種にその色を残します。サワギキョウは、群落をつくり湿原を彩る最後の花でもあります。エゾカンゾウ、ヒオウギアヤメ、ノハナショウブ、タチギボウシと続いてきた湿原の主役たち、サワギキョウが花の季節の締めを飾ります。



エゾヤマハギも秋の花。なんたって萩ですから。お盆を過ぎたころから、目立つようになります。案内舎の庭にも、何本か生えています。植えたわけではなく、鳥が運んできた種から成長しました。シカに食べられることなく、たくさんの花をつけました。小さな花には、ミツバチが来ています。羽音を立てながら、忙しそうに花から花へと飛び回っていました。



最後はハナイカリ。緑の花弁は何とも地味ですが、その形が面白い。まるで船の碇です。名前の由来はここから来ています。庭の草に混じってひっそりと咲いています。控えめな緑が、さすがしさを与えてくれます。夏が過ぎ去る頃合いを見計らって庭に咲く、夏のアンカーかもしれません。

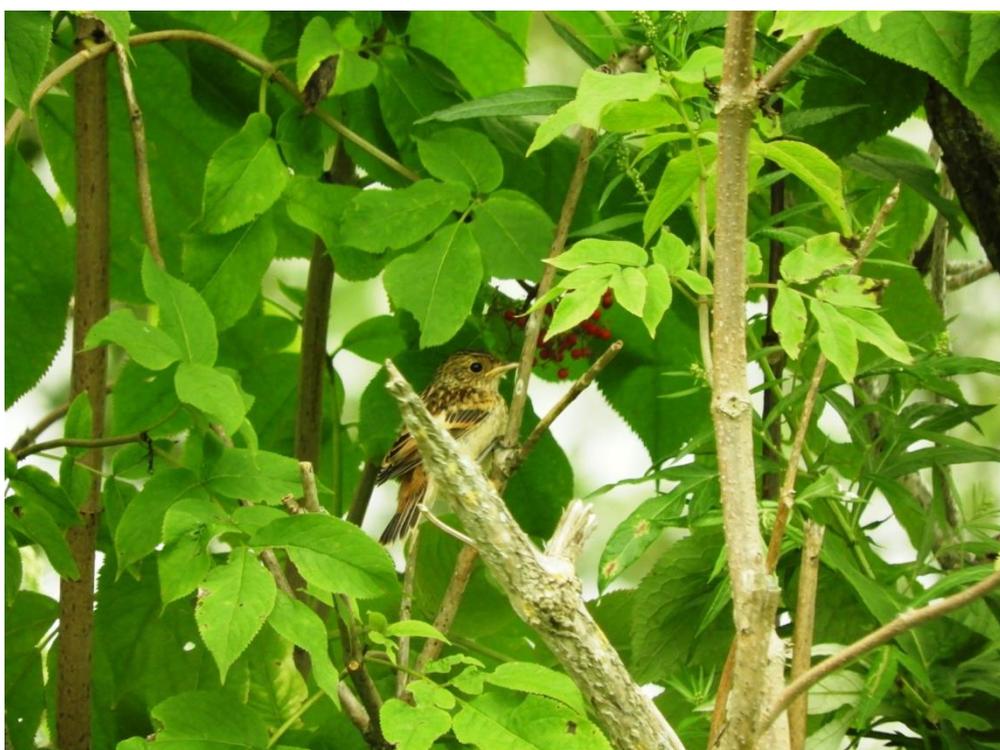


赤い実と小鳥



案内舎の庭に、エゾニワトコの木が1本生えています。この木も鳥が種を運んできて、シカに食べられることなく、見事に成長しました。例年、他の木に先んじてクリーム色の花をつけ、8月には赤く小さな実をたくさんつけます。しかし、今年は様子が違いました。花はいつものように咲きましたが、赤い実が目立ちません。

おかしいと思い観察してみると、葉影で小鳥が飛び回っています。拡大したのが上の写真です。ノビタキの巣立ちヒナが数羽、木に陣取っていました。さらにしばらく観察を続けると、決定的な瞬間を目撃しました。それが下の写真です。ノビタキのヒナがわずかに残った赤い実を食べていました。



エゾニワトコの実はい味甘い味がするそうです。人が食べると下痢をするらしいので、味見を試みましたが、鳥たちは平気なようです。鳥には人気の果実で、キジバトやハシブトガラ、アカゲラもやってきます。しかし、今年はノビタキ家族にすっかり占領され、食べつくされてしまいました。秋の長旅に備え、体力をつけないとね。



サケ戻る



今年もポロト沼にサケが戻ってきました。沼と海をつなぐ川に架かる橋の上から姿を見ることができます。

ポロト沼から旅立っておよそ4年、北太平洋で数々の困難を乗り越え、大きく成長し、生まれ故郷に子孫を残すために戻ってきました。沖には定置網、海岸には釣り人の竿の列、故郷にも危険がいっぱいです。ポロト沼に戻ってきたサケを待ち構えていたのは捕獲場です。網で文字通り一網打尽にされてしまいます。



早朝に沼の道を散歩しているとき、頭と腹が無くなったサケが転がっていました。ヒグマに捕獲されたようです。山の食べ物が少ない8月に戻ってくるサケは、ヒグマにとって貴重な食糧。人の眼を掻い潜り、ヒグマもサケ争奪に参戦しているようです。自然産卵で子孫を残せるサケはほんの一握り、群れず、遅い

時期に帰ってきたサケだけが、本懐を果たします。



シギ渡る



暑い8月にシギは渡っています。砂浜が広がる榊町の海岸に、トウネンの群れが来ていました。打ち寄せる波に合わせて歩きながら、小さな食べ物をつまんでいました。ここで栄養を補給し、長旅を続けます。何しろ彼らは、北極海沿岸から東南アジアやオーストラリアまで旅を続けます。食べることが旅の成功、ひいては生きることにつながっています。